
十回目の生き方

柚唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十回目の生き方

【Nコード】

N7472Y

【作者名】

柚唄

【あらすじ】

——この世界で生まれては死んでを繰り返す。生まれてから死ぬまで、全部合わせて百年間。死んでは記憶を持ったまま生まれ変わる。

そんな人間が十回目に生まれたのは——木の葉隠れの女の子、うずまきナルト。女の子になるのは四回目だな！。

このお話は、そんな主人公が、子供らしく振舞いつつ、暴力をふるう大人に逆らいもせず、と、原作のナルトとは違う道を進むお話し。

十回目の世界に英雄誕生（前書き）

うずまきナルト（♀）の物語。子供の振りだつてうまいですぜ。

十回目の世界に英雄誕生

「ええええん！ えええええん！」

自分の口から発された鳴き声に気づいて、意識が浮上する。

——十回目。

生まれたばかりでは目も開けられず、聴力もしつかりしない。真っ暗で何も聞こえない世界。でも怖くはないのは、赤ちゃんゆえのものだろうか。

頭が後ろに引っ張られるような感じがして、自分はそれに抗いもせず、意識を閉じた。

「うー」

赤ちゃんらしい唸り声を上げ、目を開けた。世界と初めてのご対面だ。音も聞こえる。

容量の少ない頭の中で時間軸を整えよう。とりあえず今は、第三次忍界大戦がおわったばかりのはず。

「おーナルト。起きたかね？」

視界に突如老人が入り込んできた。うわびつくりした。しかしまあ……。

——木の葉隠れの村、か。

老人の頭の上には【火】と書かれた帽子を被っている。つまりは火影。……ヒルゼン、様。変わってない。変わってないなあ……。まあいいか。

「ふむ……」

それもそのはずだ。たった二年だ。この村を離れていたのは。

ヒルゼン様はやわらかく微笑むと、頭を撫でてくる。

「お前はな、英雄なんじゃよ……。そして、行き場のない怒りを鎮めるための……」

英雄？ 今の自分に何かあるのはわかった。そして人々の怒りを

受け止めるための存在であることもわかった。……嫌だなあ。大人

の事情とはいえど。ああ、めんどくさい。

よし、寝よう。

初対面の世界に、さようなら。

十回目の世界の自己紹介（前書き）

「オレ」の前の前の人は木の葉の人でした。

十回目の世界の自己紹介

時間の流れとは早いものである。子供の頃は。大人になるとどんどん遅く感じるものだ。老いぼれになれば……まあそこまではわからない。その前に全部死んだからなあ。まともに二十歳越えたこともないけれど。

自分の——オレの名前は、うずまきナルト、だってばよ。

変な語尾は何故かヒルゼン様がつけるように言ってきた。一人称は前の前のオレからの持越しで。オレは随分とヒルゼン様に気にかけられているらしい。まあ、それもそのはず。いや、そのはず、というわけもないが。

うずまきナルト、三歳の女の子。しかし、それはただの女の子ではない。

三年前、オレが生まれる直前——この木の葉隠れの村で、九尾の化け狐が暴れたらしい。そしてその化け狐が封印されたのが、オレの中。

つまりオレは、人柱力なわけだ。

人々に忌み嫌われる、ただそれだけの存在。そういえばヒルゼン様は英雄だとおっしゃった。どうやら生まれたばかり、赤子であったにもかかわらず、九尾という莫大な力を体内に封じ込めたオレは英雄にあたるらしい。

だからと言って村で英雄扱いされるのか、と聞かれれば、いいえだ。

現在のオレの待遇は火影邸預かりではあるものの、ときどき体に気を使つてか、散歩に出かけさせられることがある。一人で、だ。といっても、火影邸を出るたびにヒルゼン様が暗部に何か支持しているようなので、暗部はオレにくつついてるのだろ。気配は感じないが。

今のオレはまだ気配の察知ができないからなあ……。チャクラと

かがわかれば、くつついてる暗部がわかるというのに。それでも忍者は四回やつてるんだ。

おっと、話が逸れた。

火影邸を出れば、そりゃあまあひどいっただらありやしない。暴行を加えてくる者はおらずとも、——加えようとしても暗部の人が無かしてるのかもしれないが——目が怖い怖い。ご婦人方はこちらを睨みながらこそそとお話するし、男たちは汚いものを見るような目で見てくる。これじゃあ体に毒だよ……ヒルゼン様ももう少し頭を働かせるべき……、いや、わざとかもしれないな。ちなみにご婦人方は聞こえる来るように嫌味を言ってくる。人柱力だということもそれでわかった。

どうやらオレを早く火影邸から出させたがっている人もいるらしい。子供に襲撃したいのか……。散歩にでかけさせられるのは嫌味に慣れるように、という有難くない配慮だろう。あと民たちの怒りをこちらに向けさせるため、か。

こんなそんなで英雄扱いされてないことはわかっただろう。

理由はというと……どうやら化け者を封じられた器、つまり、中身はただの化け狐であるという認識を持たれてるらしい。そしてその化け狐は暴れた際に多くの人をぶつ殺したとか。

まあ、人柱力なら嫌われて当たり前だというのはオレの昔の記憶からわかつてはいるんだがな。

ちなみに睨んでくるのは基本的に一般人だ。忍者は見なかったふりをする。昔の友人を見つけて、見なかったふりをされたのにはころがチクリと痛んだ。あと昔の家族とか。

その理由も大体わかる。

オレの記憶が正しければ——人柱力はクシナさんだったはずだ。

うずまきクシナ。九尾の人柱力、兼、波風ミナトの妻。

そして、オレの名前はうずまきナルト。

これらのことをつなぎ合わせて考えられること——クシナさんはすでにお亡くなりになっており、オレはお二人の娘であるというこ

と、だ。

しかし、ミナト先生がいらっしやらないのはどういうことだろうか。考えたくはないが……亡くなってしまったのだろうか。

まあそれは関係ない。人柱力がクシナさんだったということ、オレがうずまきナルトであるということ。

少しでもクシナさんと関わりがあつた人なら、わかるのだろう。オレがクシナさんの娘であると。

オレの髪の毛はオレンジ色だ。緋色にも近い。万が一にも、ありえないと思うが、クシナさんが他の金髪の人と浮気して産んだのではないければ、ミナト先生の金髪とクシナさんの緋色が混ざってこの色なのならば、大変名誉だ。ちなみに瞳は水色。ミナト先生ゆずりだ。

まあ、そんなこんなで、うずまきナルト、三歳、九尾の人柱力。「おれってばひーまーなーのー！　じーじーいーあそぼーよー！　ねー！　あーそーばー！」

三歳らしく、頑張って生きてます。

十回目の世界の自己紹介（後書き）

ご精読有難うございます。

評価などを頂けたら幸いです。

十回目の世界は過剰余暇

「あれ？」

靴ひもを結びつつ、廊下に出てきてオレを見送りにくるヒルゼン様の方を見て声をあげた。

「うん？ どうしたのかね？」

「じーじい、いまほかの人とおはなししてなかったってば？」

「いー、や？ だーれもいなかったわい」

嘘をいいなさらんな。暗部の人と喋っていたでしょうに。

ヒルゼン様はというと、すでに何もなかったような顔をしているが、心の中で子供の鋭さに冷汗を掻いてるはずだ。

子供というのは鋭い。たまに働く勘がすごい。

いつもいつも暗部に何か指図しているのはわかっている。声は聞こえないものの、ヒルゼン様が椅子から立ち上がって少し歩いた後、少し止まるのだ。これはヒルゼン様のくせである。

といっても、もちろんオレがそれを見ているわけではない。足音を聞いて判断している。ヒルゼン様の癖は前の前のオレの記憶からの持越しだ。

「ふーん。うんしょつと。いってきまーすってばよ！」

「ほい、いつてらっしゃい」

オレだって毎回ヒルゼン様に「誰かいなかったか」だなんて聞いているわけではない。でも子供というのは鋭いから、たまに大人にギクツとさせること言わねばならない。子供を演じるのは大変である。さーて、今日も皆さんから怖い視線を頂戴しに行くでしょう。

「うーん……今日はどこに行くってばよ……」

どっかからついてきているだろう暗部にも聞こえるように呟く。しっかしまあ、この口調も板についてきたものだ。

ヒルゼン様は、やはりクシナさんの「ってばね」を娘のオレに残

したかったのだろうか。別に「つてばよ」にする必要はなかったと思うんだけどなあ……。

「つてばね」はクシナさんのトレードマークだったなあ……。はあ……。もう一度クシナさんにも会いたいものだけど、もう亡くなつてらっしゃるのだろうか。

大体。

大体、前の前のオレはすでに死んでいるんだ。会いたい気持ちはあれど、「実はオレ、あの人だったんだ！」なんて言うつもりはない。もう、関係ないのだから。

記憶は一つ一つ切り離して過ごすつもりである。前までもそうだった。

だから、たとえば記憶の持越しによって敵の情報を知っていて、それを仲間に教えれば仲間を死なせずに済む場面であろうと、それは今の自分の記憶による情報ではないから、仲間には教えない。もちろん仲間も死んでしまう。

それでもオレは構わない。いや、構わない、わけではないが。それが一番——無難に過ごしていく道だから。

キーコ。キーコ。

結局一人、公園のブランコに乗っていた。

公園に入った瞬間、奥様方は我先にと子供を引き連れて帰った。中には自分の子供じゃなくとも無理やり帰らさせていた。

もちろん気持ちはわかるとも。わかるともさ。

奥様方から見れば、オレは一匹の化け狐。何やら情報にも変な規制がかかっているものだからなあ……。封印されているというよりは、化け狐が人間に化けたと考えているのだろうか。

そしてその化け狐が自分の子供に近づいた瞬間、殺されたら——なんてことを考えれば、オレから逃げるのは当然のことだ。ああ怖い怖い。

キーコ。キーコ。

いかにも寂しそうな雰囲気を漂わせてブランコを漕ぐ。ちなみに演技ではない。心の底から寂しい。

何回も生まれ変わってきたからって、一人でも寂しくない人間になっただけではないのだ。

家庭内暴力のある家庭に生まれたことだってあるし、親が忙しくて家にほったらかしにされたことだってある。けれど、それとこれとはまた違う。

—— 四六時中、監視付き。

子供として変な事をした瞬間、上に知らせが行くだろう。お前は本当にうずまきナルトかと拷問され、幽閉され……。それ以上は想像したくない。

とにかく、何かやることを見つけたことができる前とは違い、監視が付いているというのは大変めんどくさい。

そして一人ぼっちであるという事実。

「……ふん」

いじめてみた。まあどうにもならないわけだが。

キーコ。キーコ。

うずまきナルトは、どうも生き辛い。まあ、まだ暴力を振るわれていないだけ、ましというべきか、

十回目の世界は過剰余暇（後書き）

監視されてちゃ、薬草取りだってできないし。

よく考えたら子供らしく生きる主人公がなんで女の子に生まれ変わったのに「オレ」って使うんだろう。理由を考えておこう。

八回目の世界の自分確認

もっしもっしきゅーびー、きゅーびさーんよー。

心の中で手毬歌に合わせて歌ってみた。もちろん何も起こらない。
……ふーむ。

今日のオレは見晴らしのいいところにきている。この葉隠れ全体を見渡せる作りとなっており、前の前のオレもたまにここに来ていた場所だ。毎日公園に通っていれば、オレにおびえて他の子供たちが遊べなくなってしまう。

だがここは風が強すぎる。あと会談が長すぎる。三歳の子供には地獄だと思えん。だからここにはそんなに來ないのだが。

きゅーびさーん。

心の中で呼びかけてみる。反応はない。

どうにも、自分の中に、本当に九尾が封印されているのかどうか
が怪しい。呼びかけても反応しないからだとか、そういうわけではない。

体に異変を感じないのだ。

それはお前、チャクラをまだ感じ取れねえからじゃねえの、というツツコミを自分でしておくが、そうでもない。

それとも、人柱力とはこういうものなのか。でも実際、このうずまきナルトの体は一般的な子供に比べて発熱することが多い。九尾の封印によって自分でも感じないところで疲労がたまっているのだろうか。

今迄人柱力になったことなんてないからよくわからない。初体験、である。

あ。

木製の椅子にあおむけに倒れつつ、ある可能性を思いついた。

——チャクラを練れば、何か起こるかもしれない。

びゅうっ、と風が吹く。

アカデミーに入ってからまた検証してみるとしよう。実際に何か起こったら怖い怖い。チャクラが乱れて九尾の封印解けたー、なんてことが起こったものならオレは苦しみながら死ぬのだろう。それは嫌だ。まあ抗いはしないけれども。

さーてつと。

倒れていた体を起こし、すくつと立ち上がる。

「あつちいつてみよつてば！」

探検と称して記憶にある場所をあちこち回るだけである。

口調については……どうも「つてばよ」を付けづらいことがあるのだ。たまに変になる。が、くつついてきてる暗部さんにはちゃんと意味が伝わっただろう。さてと、行くか。

「わあ、かつこいい形の石だつてばよ」

そう呟くオレが見ているのは任務で亡くなった人々の名前が載った石。つまりは慰霊碑。

まだ教育を受けておらず、文字という概念はあるものの、字の読めないうずまきナルトにとってこれはただの石でしかない。

ついてきている暗部はどう思うだろうか。クソガキにかつてともに戦った名前を見られたくない、だとか、そういうことを思っていたりするのだろうか。

とりあえずかつこいい形の石を興味津々に見ている、という雰囲気を作りつつ、上から下まで、文字を読んでは悟られないように見てみる。

—— みつけ。

前の前のオレは殉職した身であった。だからちゃんとこの石にも名前が刻まれている。

そして……今、視界の端に見たくなかった名前を見つけてしまった。

—— かつて恋した女の子。

君も、いなくなってしまうんだね。

今のオレに、君への恋心は残っていないけれど。寂しいものは、寂しいのだから。

—— 寂しい。

大切な人がなくなっているという事実は、寂しい。今のオレには関係ない、だけど、一方的に知ってるのは自由だ。

ほら、また見つけた。

—— ミナト先生、クシナさん。

…… なんだか、疲れたってばよ。

うずまきナルトの体は睡眠を訴えているようだ。ならばオレはそれに答えよう。どうせここで眠ろつが、暗部の人が火影邸へ連れ帰るのだ。そこらへんはすでに実証済みである。

そんじゃ。おやすみなさい。

十回目の世界の睡眠妨害（前書き）

お気に入り登録、感想ありがとうございます。
評価などを頂けたら幸いです。

十回目の世界の睡眠妨害

真つ白。この空間を表すにはその一言に限る。

厳格に言えば真つ白ではない。でが、その一部分を除けばここは真つ白だった。除かれた一部分。それは、黒で書かれた「三十六」という数。

この数字が意味するのは――余命。

カウントダウン形式で減っていくこの数字は、最初は百もあったはずだ。一回目の人生は精神的に幼く、しっかり覚えていないが、自分の年齢を考えれば、最初は百であった。

年を取る度にこの数は減っていき、今はすでに三十六年しか残されていない。いや、三十六年も、というべきか。

そんな余命が示されたこの空間はなんなのだと聞かれれば、「自分、精神世界？」としか答えられない。だって自分でもわからないから。

現実世界での意識がなくなったあと、オレは夢を見るか、それかこの世界で目覚める。

目覚めたといっても意識ははっきりしない。寝ぼけている感覚で目を開け、前を見つめ続け、そして目を覚ます。

意識がはっきりしないから、どれだけ見つめ続けていたのかさえわからない。だけど、目覚めるのは朝なのだ。

「ん……」

手を丸め、眠い目をゴシゴシとこすって起き上がる。そして目を開けてから、ようやくいつもと様子が違うのに気付いた。

まず、窓から日の光が入ってこない。天気が曇りだとか、そういう理由ではなく、つまりは夜だった。

そして部屋の外が騒がしい。走り回る様子はないものの、足音一つ一つが重く苦しい。

さて、起きてしまったからには外に確かめに行こう。子供とは好奇心旺盛なのである。どうせ監視だつてついてるだろうし、一度起きた子供が何もせずに寝る、だなんて違和感のあることをすることもできない。

ちなみに個人的には行きたくない。いや、覗いてみたいが、明らかに今何か大変なことが起きているのだろう。それを邪魔するのは非常に申し訳ない。

とてとて、と畳の上を歩き、襖を開ける。

「おや、ナルトか。五月蠅くて申し訳んなあ」

いかにも今この部屋の前を通りました、という形でヒルゼン様が立っていた。しかし騙されてはいけない。

おそらく、チャクラを感知したのだろう。そしてオレを部屋から出したくないので、先回りした、と。

「じーじいつ、なにが、あつたつてば？ おしごと？」

「そうじゃ、おし」

「ヒルゼ、っ化け！？」

ヒルゼン様の発言を遮って出てきたのは若そうな中忍だ。こいつ、絶対今化け狐って言おうとしたぜ。

「……今行く。そこで待つておれ」

「はっ！」

ぼんぼん、と頭を撫でられ、「早う寝るんじゃぞ」と言われて襖を閉められた。……寝るか。オレつてば、いい子だし。

今のように、新米だと思われる忍者や、まったくいつてクシナさん、またはその世代と関わりがなかった忍者はオレを化け狐を呼ぶことが多い。そばに熟年した忍者がいれば別だが、そういう忍者が二人以上にいるときは、オレを見るたびに化け狐だとかこそそ言つてることが多かった。

しかしまあ、何があつたのだろうか。情報収集のために、明日は街中を歩くことにしよう。

そう決めて、オレの意識は再び落ちていった。

次の日。

昨日の事件については色々わかった。奥様方というのは耳が早いものだ。

どうやら——日向家現当主、日向ヒアシが弟、日向ヒザシ様が次期党首の日向ヒナタ様を入ってきた賊から身を庇い、お亡くなりになったらしい。

真偽は、オレにはわかりはしない。

十回目の世界で沈黙墓参

トイレに行きたい。

そんな尿意を感じて起きあがる。

オレは三歳であるが、すでにオムツなぞつけてはいない。理由は簡単だ。取り換えははずかしい。

だからといって最初からトイレを覚えているのもおかしい。だから最初の数十回はおもらししていた。もちろん取り換えは恥ずかしかった。子供っぽく抵抗はしたが、羞恥心もあつたんだぞー。そして頃合いを見計らってトイレを覚えれば問題はない。ものわかりのいいつまりナルトの完成である。

そんなこんなで夜中に起きてトイレに行く三歳児である。

トイレまでよたよたと歩きつつ、誰かがしゃべっているのが聞こえる。ふむ、忍者はやっぱ大変だ。そしてオレがいることに気がつけちゅーの。あ、でも子供じゃ気配らしい気配も感じないか。

「――」

「――」

「くちゅんっ」

何やら内容が内容だったので、これ以上聞いてはいけなないと判断してくしゃみのふりをした。

これ以上、気づかれずに歩いて行ったら色々とやばかっただろう。聞いているいけないものは聞かない方がいいのだ。

くしゃみのおかげでこちらに気づいた忍達はそそくさと火影邸を出て行った。まったく、小娘一人に話を聞かれてどうする。

「くしゅんっ」

隙間風に晒されて本当にくしゃみが出ってしまった。トイレトイレと。

……うちはこのこと、だっただんたろう。

しかも、多分……うちはが村に警戒されている？

忍も忍で内輪の話をしていたから、「うちはが村に警戒されること」を前提に話していたし……。

あと、現当主が変わっていなければ、長男はイタチのことだろう。八歳で開眼とか、オレびつくりだよ……天才児は違うな。

「ふわ……」

鏡に映るお下げの女の子。うずまきナルトはなかなかかわいい。

流石ミナト先生とクシナさんの娘だけある。将来が楽しみだが――

――同時に、性的虐待も起こりそうで怖い。

うう眠い眠い。こんなことは考えなくていいか。早く布団入って寝よーっと。

うずまきナルトにとって、誕生日というのは祝いの日ではない。

村は一齐に黒を纏い、自分を見る目はより一層恨めしくなる。

そんな誕生日が、今年もやってきた。

うずまきナルトの誕生日は、九尾が村を襲撃した日であるらしい。これは、一般人の見解であり、正しくは、九尾の封印が解かれて暴れた日、の方が正しいだろう。

つまりはこの日にクシナさんがお亡くなりになり……言葉通り、生まれたばかりの赤子のオレに九尾が封印されたのか。もしかしてオレを産んだからクシナさんが亡くなってしまったのか？ 母体と子供の優先順位とかが病院で飛び交い……そんなことを考えるとクシナさんに申し訳なくなってしまった。

「ナルト、この花束を持つのじゃ」

空は灰色、雨はしとしとと降る中、ヒルゼン様が菊の花を渡してくる。

「おうつてばよ」

それを大人しく受け取れば、こちらを睨んで見ていた奥様方がこ

そこそと喋りだす。

「ほら、あの子……」

「人の神経逆撫でさせるわ……」

そんな声には聞こえぬふりをして、ただただ地面を見つめた。

あちこちで泣き崩れる人がある。涙をこらえて空を睨む人がある。泣きだした親をどうにかしようとする子供がいる。目を閉じて静かに立つ老人がいる。

これはすべて——すべて、オレの中に封印されている九尾のせいである。

人が悲しむのを見るのは好きではない。見てることだって悲しい。子供だからか、今ここで貰い泣きしそうである。こらえるけど、いくらこの光景がオレのせいではないとはいえ。

この沈黙の時間の間は、胸いっぱい複雑な気持ち広がった。

うずまきナルト。今年で四歳になりました。

十回目の世界の醤油拉麺

「わしがいいところにつれてってやろう」

ヒルゼン様がそう言ったのは、九時過ぎのことである。子供はもう寝る時間だ。というかいまから寝室に行こうとしてました。

「いいところだってば？」

「うむ。ついてからの楽しみじゃ」

これはもしかして……夜に外へ出かけられるということなのか？引率者付きではあるが、暗くなってから外へ出かけるなんてことはそうそうない。

「おー。楽しみするってばよー」

まあ、今日は俺の誕生日だからな。意識がすっかり保てるようになってからの、はじめての。

「へい、いらつしゃい！」

いいところ——そういつて連れてこられたのは、ラーメン一楽だった。……えー。ヒルゼン様、このチョイスは如何なものだろう？夕ご飯もつくに食べたし？何か子供に悪い遊びを教えるよ。うだ……。

しかし、今日はお店を休業させてる人の方が多いというのに、一楽は通常営業みたいな感じだ。お昼は一緒に黙祷しただろうけど。「お、ヒルゼン様ですか！で、こっちは……ああ、ヒルゼン様が預かってらっしゃる」

「ナルトじゃよ。ほれ、自分で自己紹介せい」

テウチさんの表情は複雑だ。まああたりまえだろう。お客は神様だという言葉があるが、その神様が村を滅ぼしかけた存在であれば、それは客として扱いたくないものだ。しかしヒルゼン様の手前、そのようなこともできない。

居心地が悪い。悪すぎる。どこがいいところだ。大体、元知り合

いだった人にそうやって嫌がられるのは心苦しいものだ。

あ、そうか。オレの母親、クシナさんがこの一楽が大好きで、だからこそ、ヒルゼン様は連れてきたのだろう。……有難迷惑でもあるんですけどねえ。

「うじゅまきナルト、えっと、よんさい、だつてばよ」

大人の気持ちに敏感な子供というのは、嫌がられてると気づけば、自然に暗くなるものだ。まあ、今まで元気よく自己紹介なんて、ね？

「……おお、そうかいそうかい！ よく来たなあ！ 嬢ちゃん、ラーメンは好きか！？」

ふおおおお相変わらず暑苦しい。

けど、一瞬でオレに対する嫌悪感のようなものが消えたのは何故だろう。……ふむ。考えるまでもなかった。

自己紹介したじゃないか。

自分の店の馴染み客の名前はうずまきクシナで。その恋人は波風ミナトで。

少なくとも顔は二人に似てるはずだし、名字が名字である。

気づいたん、だろうなあ……。何も言わないだなんて、いいおつちやんだなあ。

「らーめん？ それなんだつてばよ？ このいい匂いのするやつだつてば？」

うずまきナルトはラーメンなんて食べたことないのである。今日四歳になったばかりですし。

「はっはっは。すっげーうまいぞ！ ヒルゼン様何味になさいます？ あ、ナルトは何かアレルギーはありますかねえ」

「ふむ。わしはしょうゆ味にしようかの。ナルトは好き嫌いがいないからのう。ナルトと二人で一皿食べるわい」

「はい！ しょうゆ一人前ー！」

一楽のラーメンは絶品である。これはとくに知っていたことだったが、もう一度深く認識させられた。

いやあ、うまいうまい。

「どうだぁナルト！　おいしいか？」

「うん……　すごくおいし、かった、ば、お……」

そしてオレの眠気はすでに限界を超えていた。大体お腹が膨れたら眠くなるというのに、子供が夜遅くまで起きてちゃ眠いったらあ
りやしない。

とりあえず、明日急激な体重の増加がありませんように、と少し
心配しつつ。

おやすみ。今日は楽しかったです、ヒルゼン様、テウチさん。

十回目の世界の料理勧誘

ヒルゼン様に孫が産まれたらしい。

けれどこれは、ヒルゼン様直々に聞いたわけではない。廊下でペちやくちや話していた忍達の会話を偶然、偶然聞いたのだ。

そして、本人から教えてもらったのは——三日後であった。これからは孫に構い、オレの面倒は見なくなるのだろう。そう考えると、少し切なくなってしまった。あーあーいやだいやだ。

「ナルト、おいしいご飯は好きかね？」

久々に部屋を訪ねてきたと思つたヒルゼン様の第一声がこれだ。お昼ご飯の前でもなければ、夕ご飯の前でもない。だったらどうしてそんな質問をするのだろうか？

「もつちろん、好きだつてばよ！ ラーメンが一番好きだつてば！」最近またラーメンが食べたくて仕方ない。ただしわがママを言うのはオレの性分じゃないので我慢している。

「おお、そうかそうか。ナルトは、自分でそのおいしいご飯を作つてみたいと思わないかね？」

……そ、つか。そつかー、そつか、そつかー。

ヒルゼン様はどうやら——オレに料理を覚えさせたいらしい。

そして、一人でも生活できるようにさせて——この家から追い出したいんだ。

正直、それ以外には考えられない。

もしかしたらほかの大名などに早く追い出すように催促されたのかもしれないが、一応六歳まではここに置いておくというのを聞いたことがあるというのに。大体、四歳の子供に料理を教えるだなんて頭がイカれてるとしか思えない。

刃物、火の扱いより前に、一人暮らしをさせられるなら、買い物という難関もある。ああ、食材は毎日用意してもらえるのかもしれない

ないが、そうじゃなかったらとても困る。子供に金銭のやり取りをさせるだなんて。大体オレは化け狐であるから、買物もしっかりやらせてもらえるだろうか。

刃物、火の扱いは名門の忍の家なら修行だとかなんとかで触れているものではあるが、オレは今のところ一般の子供と同じ生活だ。監視はされているけどな。

まあこんなそんなで、色々言いたいことはあるが。

ヒルゼン様も、嫌いだ。

ほんの少し、なんとなくーく信じていたというのになあ。

「おう！ 自分でも作ってみたいでばよ！」

「おお、そうかそうか！ 今度教えてやろう！ じゃあわしはまだまだ仕事があるからの」

……はあ。

料理は苦手である。おっと、言葉が足りなかった。

料理を習うのは苦手である。

これだけはどうしようもない。

料理なんてできるというのに、初心者のふりをするのはどうもきつい。オレが作る料理はすでにおふくろの味の領域である。

しかも、八回目も木の葉で生まれたこともあって、いろんな人にオレの料理を食べさせたことだってあるのだ。

今回の人生では、あまり年上の人にはご飯を食べさせてはダメだろう。結構親しい人は料理の味覚えたと思うし。ていうかあいつには無理やり覚えさせたし。

……あいつ、元気かなー。

ま、石には名前がなかったし、元気だろうけど。

十回目の世界の料理勧誘（後書き）

ヒルゼン様善人役やらせたかったのにどうしてこんな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7472y/>

十回目の生き方

2011年12月19日13時49分発行